翻刻・『雨夜鐘四谷雑談』三編

光延真哉

本稿は、お岩・小平次の二つの怪談を結び付けて構想された合巻『雨夜鐘四谷雑談』の三編（柳下亭種員作・一雄斎国輝画、安政元年〈一八五四〉刊）の翻刻紹介を試みるもので、「翻刻・『雨夜鐘四谷雑談』初編」（『東京女子大学紀要「論集」』第67巻第1号、二〇一六年九月）、「翻刻・『雨夜鐘四谷雑談』二編」（『東京女子大学紀要「論集」』第68巻第1号、二〇一七年九月）の続稿である。凡例は次の通りである。

【凡例】

一、底本には東京女子大学図書館所蔵の甲本「B913.5/R2/（1–8）」（初刷り）を用い、適宜乙本「B913.5/R2/b（1–6）」（後刷り）も参照した。図版は甲本（初刷り）を用いたが、参考のため、地の刷りが異なる絵表紙については乙本（後刷り）の図版も掲載した。

一、本翻刻は、本学現代教養学部人文学科日本文学専攻の平成二十八年度の授業、「日本文学演習（古典）A」における学生の発表を基に、稿者が表記の統一等の修正を加えたものである。学生の担当範囲は次の通りである（五十音順）。

棄原志帆氏　12ウ・13オ
近藤沙耶香氏　11オ、11ウ・12オ
高橋映夢氏　17ウ・18オ
田中彩乃氏　5ウ・6オ、7ウ・8オ、14ウ・15オ
中田紗良氏　6ウ・7オ、8ウ・9オ、13ウ・14オ
林田千花氏　9ウ・10オ、10ウ、16ウ・17オ

右以外の箇所は稿者が翻刻した。

一、句読点を補い、通行の字体を用いた。清濁は原本通りとした。
一、適宜漢字を当て、元の仮名をルビの位置に残した。ただし、原本で元から付されているルビについては（　）で囲み、これと区別した。
一、明らかな誤字については、ルビの位置に（ママ）と記した。
一、文中で会話文と判断できるところは適宜「　」を補った。
一、通読の便のため、適宜改行を施した。
一、読み順を示す飛び印の記号は省略した。
一、丁数は、原本の丁付に従い、〈1オ〉〈1ウ〉の形で該当部の冒頭に示した。
一、角書、割書は〔　／　〕で示した。
一、判読不明な箇所は、その字数分を□で表記した。
一、その他の注記は［　］で示した。

一、作品中には、今日の人権意識に照らして不適当と思われる表現が見られるが、時代的背景と作品の価値とにかんがみ、そのまま掲載することとした。

なお、図版として掲げていないが、下冊見返しでは、初刷りと後刷りとに若干の異同が確認できる。すなわち、初刷りで「庚寅（ママ）新梓」（安政元年〈一八五四〉の刊行なので、「庚寅」は「甲寅」が正しい）となっている部分が、文久元年（一八六一）刊行の後刷りでは「五へんより川竹其水のさく」と改刻されている。「川竹其水」とは河竹黙阿弥のことで、前稿「翻刻・『雨夜鐘四谷雑談』初編」で述べたように、安政六年（一八五九）刊行の五編より種員に代わって本作を嗣作している。

【翻刻】

〈上冊見返し〉

雨夜鐘四谷雑談（あまよのかねよつやざふだん）〔三編／上冊〕

柳下亭種員作

一雄斎国輝画　〔錦昇／文庫〕

〈1オ〉

此四谷雑談に綴合す小幡小平治の種本なる京伝翁の安積沼に、画工菱川師宣の事をいだせり。彼人は安房国平群郡保田村の産、東都の住し、元禄の頃専世に行れしとぞ。居所と時代の近きを厭へば、足利の代の人といふ浮世又平にこれを換たり。此は越前の産にして岩佐氏、名は又兵衛とは本朝画史に載たるを、或人は又俚談を実とし、否、大津絵を画始し又平は、近江の出生、従来大津に育し者、彼と此とは同名異人と、追分画の元祖ゆゑ歟、其伝までが両街にて、説も区々紛々は、表題に弓雨夜鐘の徒然に熟考証、後巻に挙ばやとおもふなり。

嘉永甲寅陽春　柳下亭種員記（印）

〈1ウ・2オ〉

大津駅の画工、浮世又平

浮浪香西喜太夫が一子、菊之助の繍像

〈2ウ・3オ〉

大和国十市里の郷士、穂積順蔵の女十六夜

花洛四条の舞師、玉川仙之丞

烏帽子箱〔寛文二年刊行／立以撰〕

をみなへしに置かぬる

霜やうす化粧　正吉

〈3ウ・4オ〉
歌妓琴治
高田大八郎の首級

高田大八郎が胤、琴治が産子妻之助、后に神谷伊右ヱ門となるはこれなり。

痣平が女房、於疵
寒念仏の修行者、無名氏

〈4ウ〉
音川家の浪士、香西喜太夫

痣平於疵が間の一子左市、后に小幡小平治が妻於塚が密夫、鼓撃安達多九郎となるはこれなり。

〈5オ〉
二へんよりつゞき 大八は捕り手の人数の廊下の辺りを囲むを見て、「さては悪事の顕れし」ト、心に推し琴治に向か

ひ、「疾く抜け出でゝ、下に置きつる二腰を持ち来たれ」ト、言葉せわしく言ふ間もあらせず、立てきる障子、踏み砕きこそ入りながら、声々に、「仕官の身をもて悪事をたくみ、金子を騙りあまつさへ、相摺りの老女を殺せし大罪人の高田大八。管領家の命を受け、召し捕りに向かふたり。疾く縄掛かれ」と呼びかけつゝ、立てたる屏風引き除くれば、内に忍びし大八は、傍の火入を取るより早く、組子目当てに投げつくる。

灰は四方〔し／ほう〕へハツト散り、屏風に描く秋の山、一ト間は霧の立ちしに等しく、朧々ト見え分かず、目口に入りて慌つるなかに、気早き組子たゞ二人、「捕つた」ト声かけ組みつくを、身をかはしつゝ真の当て、双方「ウン」ト仰に反る。続いてかゝる両人が、閃かしたる十手の下をかいくゞりつゝ、諸足払ひ、戻りを打たせて投げ出す。物音、人声たゞごとならねば、辺りに臥したる客人らは、何事にやと狼狽えつゝ、廊下の内を逃げ惑ふ。これさへ一つの騒ぎを増し、家内の騒動上を下、取り込む間に琴治は手早く、大八が つぎへ

〈5ウ・6オ〉

つゞき 刀持ち来たり、隣座敷の襖の陰より差し出すを、取るより早く閃かしたる剣の稲妻、進む捕り手を二人まで、踏み散らしたる夜着〔よ／ぎ〕のうちへ、同じ枕（マヤ）らに切り伏せたる、思ひのほかの早業に、恐れてしばし漂ふうち、窓の格子を蹴破りて、屋根へひらりト躍り出る。

取り逃がしてはかなはじと、後に続いて追い出る組子、二の目を詰めて花菱屋の、四方を取り巻く面々は、かくと聞くより裏表の、屋根へ梯子をうちかけて、我遅れじと馳せ昇れば、落ちかゝりたる二十日の月は、西の山手に白々と、暁近き日の影は、東の海に紅見せ、果て白波の相模灘、こゝ小動の磯近く、友呼ぶ千鳥 二のまきへ

一の巻より 明け烏、この捕〔と／り〕物を知らせんとて、宿の内をうち立つる、太鼓の音は朝嵐に、うち寄る波ト

共に響き、組子が合図掛け声は、松吹く風ト等しく聞こえ、いと華々しく見へたりけり。

琴治はさらに大八が、悪事の様子知らざれば、何故と案じ詫び、身を揉み焦るを花菱屋の、亭主は捕らへて動かせず。屋根の上には大八が、死に物狂ひと白刃をうち振り、寄り来る捕り手を切り払ひ、切り払ひつゝ、隙間もあらば逃れ去らんト、気は焦れど夜はあやにくに明けはなれ、身を忍ぶべき陰もなし。されども心を励まして、なほ切り抜けんとするうちに、瓦に置ける露霜に、足踏み滑らし転けかゝるを、つぎへ

〈6ウ・7オ〉

つゞき 組子は得たりト折り重なり、遂にそのまゝ戒めて、「高田大八は召し捕つたり。宿の出口の囲みを開き、旅人を早く通すべし」ト呼ばはり〳〵、大八を面々囲みて下に降り、鎌倉指して引き立て行きぬ。

管領家の決断所には、高田大八が僕なる痣平が、主の悪事を訴へ出るを、聞くとそのまゝかねてより、大八が身の行ひの良からぬを、疑ひ思ふ折柄なれば、すぐさま組子を二手に分け、一ト手は人数も数多となし、大八を捕らへんとて大磯に急ぎ行けば、今一ト手は十人余り、痣平を先に立て導となして、藤沢なる伊藤快甫の家に馳せ行き、裏表の戸を踏み破り、提灯照らし乱れ入り、見るに快甫は家にあらねば、辺りの者をつぎへ

〈7ウ・8オ〉

つゞき 呼び出し、その行方を吟味なすに、誰とて確かに知る者なければ、こゝかしこに手分けなし、戻る道を詮索なしけり。

快甫はこの夜、馬入〔ば／にう〕川の渡し場へ、賭け事に行き、夜明けて後そこを出で、藤沢へ帰らんとて、南

郷〔なん／ごう〕の縄手まで戻りかゝるに、雲助どもの並木の辺りに焚火なしつゝ、大八が騙りのことの顕れて、大磯なる花菱屋に捕り手の向かひ、今朝明け方にかしこにて捕らへられ、鎌倉へ引かれしトいふことを、高声に話すを聞き、心のうちに驚きて、「このまゝ家に戻るなら、我が身もすぐに捕らへられん。こゝに噂を聞いたるは、まだ我が運の尽きぬ験、思へば危ふきことなりし」ト、引き返して山手にかゝり、甲斐〔か／ひ〕の方へぞ逃げ行きける。

つぎのゐとき 香西〔こう／さい〕喜太夫は、思ひがけなく望む菅家の一軸を得しより、急ぎて都に上り、主君音川勝元に件の品を奉り、しかぐくにて手に入りしト、委細の様子を言ひ上ぐるに、勝元聞きて深く喜び、まづ古筆家〔こひ／つか〕のなにがしを招きて、それを鑒定〔かん／てい〕さするに、かの者これを見終はりて、「こは似もつかぬ贋物なり」ト、明白に告げゝれば、勝元強く憤り、「言ふに絶えたる虚けの働き。重き咎をも負はせんなれども、先祖よりの勤功に愛で、命は助け得さすべし。疾く喜太夫を追放せよ」ト、近習の武士に命じつゝ、その座を蹴立てゝ奥に入れば、辺りの者も気の毒さに、目と目を見合はせ手持ちなし。

喜太夫はたゞひれ伏して、身の落ち度を悔やむのみ。今更何と詮方なく、しほくトして家に戻り、母親梓、妻お町に、かくト告ぐるに二人はたゞ、夢かトばかり憂い嘆くを、様々に賺し慰め、俄に家を取り片付け、「年頃慣れし都を立ち退き、知る辺を頼り近江国、大津の里に家を求め、このところに住み着きしが」、喜太夫は母ト妻に言ふよう、「我が身の落ち度にかくなるは、詮方なけれど、このまゝにうち捨ておかば、騙りのことは偽りにして、それがしが金子を私したりしものかと、思はれんも口惜しければ、今一度鎌倉へ下りて、彼らを詮索なし、身の明かりを立つべきに」ト、母親の介抱は妻にくれくれ言ひ諭し、再び吾妻へ下り行きぬ。喜太夫は道を急ぎ、鎌倉に着きし日より、その様子を訪ひ糺すに、田丸宇内と つぎへ

大神宮
□之用心
諸浪人、舩こぼれ、村中へ入べからず　村□人
南郷村掃除場

〈8ウ・9オ〉

つゞき　偽りて、一軸を我が身に売りしは、管領家の身内人高田大八といふ者にて、母ト言ひつる相摺の、老女を殺せし事の様子。質屋の手代ト欺きし、彼が中間痣平が、訴人によりて大八は、大磯にて召し捕られ、獄屋の内に繋がれし由。今一人の同類なる、古筆縫之助ト言ひし者は、快甫と呼べる藪医にて、逐電せしトいふことまで、詳しくは知れながら、目指す仇なる大八は、扇谷の獄屋にあれば、いかにとも詮かたなく、せめて痣平、快甫をなりとも、詮索せんト思案を定め、鎌倉をもまた立ち出でけり。

これより十一丁目のゑとき　高田大八は、獄屋に入りて様々に拷問を受くれど、悪事をさらに白状せざれば、獄司も責めあぐみ、「この上は逐電せし、伊東快甫を召し捕りて、彼に事の白状させ、諸共に成敗せん」ト、その在処を詮索するうち、今年も過ぎ行き翌年の、皐月半ばの頃トなるに、大八は獄屋にありて、痣平が身の悪事を逃れんために、お疵ト馴れ合ひ訴人して捕らへさせ、今は二人夫婦となり、世を広く暮らす由を、聞き知るからに無念に堪へねば、「いかにもして逃れ出で、彼奴らを殺し腹を癒ん」と、しきりに暇を窺ひしが、ある時激しく雨降り出で、物音さへも分からぬ夜あり。「今宵こそは」ト思ひければ、人静まりし頃を見すまし、獄屋の格子を押し破り、外に出れば五月雨は、篠突くばかりに降りしきり、つきへ

古筆の鑒定家何某

〈9ウ・10オ〉

つゞき 目先も知れぬ真の闇、ぬかるむ道を踏み締めつゝ、歩みかけしが立ち留まり、「管領屋敷に抱へられ、奉公したのもわづかの間。それから程なく獄屋の暮らし。今鎌倉を立ち退けば、扇谷もこれが見納め。せめて主人に取った不請に、どうがなして恩返し」ト、小首傾け思案せしが、うち頷いて、「あるは〳〵。首尾よくここを立ち退いても、懐に物がなくては、跳ねるも飛ぶもまゝにはならぬ。そこを自由にするのは金。世の譬へにも言ふ通り、毒を食らはゞ、さらばこれから。幸ひかねて金蔵の、勝手は知つたり。忍び寄り、持ち出さるゝだけ持ち出すが、苦痛を受けた返報」ト、また引き返し金蔵を、心の当てに探り寄る、欲に目のなき五月闇、足音をさへ盗み気を、「怪し」ト吠ゆる犬よりも、人の皮着た畜生の、なす由ぞいとあさましき。

ようく〳〵かしこへ忍び寄り、足に触りし石取り上げ、難なく壁を打ち毀ち、数多の金を奪ひ取り、塀より外へ差し出でし、見越しの松によぢ登り、構へのあなたえ下り立つ折柄、棒突き立てゝ夜回りの、僕二人来かかりしが、かくト見咎め双方より、「怪しき曲者、逃がさじ」ト、棒ひらめかして打ちかゝるを、身をかはして奪ひ取り、そのまゝ脾腹を一ト当てあつれば、「ウン」ト仰に反り返る。今一人が驚きて、声を立てんトするところを、どんぶり蹴込む溝の中、這ひ上がらんトもがく間に、行方も つきへつゞく

小町寺〔小野小町／九十九髪像〕

〈10ウ〉

つゞき　知れず逃げ失せけり。

香西喜太夫再度関東へおもむく。

〔禁／方〕玉壷　生肌膏　一貝　卅六孔

火傷、切傷、一切の腫物、髪の毛禿げたるにつけて毛を生ず。

〔金瘡／即愈〕奇功紙　一枚　廿四孔

打身、挫き、すりこはし、肩手足の凝りに貼りて良し。頭痛に妙なり。又毒虫に刺されたるにより。

此外二種とも功能多し。包紙に記す。

製薬所　新　吉　原　玉楼

取次所　真玉山東石坂下　柳下亭

種員作　国輝画

〈下冊見返し〉

柳下亭作　国輝画

雨夜鐘四谷雑談

第三編下集　錦昇文庫

庚（ママ）寅新梓

〈11オ〉

高田大八が獄屋を破り、金蔵の金子を奪ひ、逃げ失せし事の由を、獄守より達しければ、管領家の怒り甚だしく、「彼を捕へ引き来たるか、またはその住むところを訴人するものあらば、いかなる罪をも許せし上、褒美は望みに任せん」とて、絵姿を以て国々を、落ちなく探し求れども、在処はさらに知れざりけり。

二丁おいてつきのゐとき 痣平はお疵が勧めに、大八快甫を訴人せし故、己は同類の難を免れ、その上にてお疵が、早くも奪ひ出だせし、大八が家財をそのまゝ我が物とし、夫婦トなりしが、「さすがにも、鎌倉辺りに住まはんは、何とやら安心ならねば、その頃武蔵の石浜〔いし／ばま〕は、千葉〔ち／ば〕殿の城下にて、繁昌大方ならぬ故、かしこへ行きて世帯せん」ト、言ひ合はせて つきへ

〈11ウ・12オ〉

つゞき 武蔵え移るに、高田の家に居し頃より、お疵は早くも痣平の、胤を宿してありければ、石浜へ住みつきて、ほどなく産みしは男子にて、その名をば左市とつけたり。

夫は時の物など売り、または人に雇はれて、些かの賃銭取れば、妻は我が子を育む片手に、糸を取り機を織り、しがなく浮世を渡りつゝ、一ト年を越すうちに、ある日痣平は人に雇はれ、隅田川の向かひなる、花又村の辺りへ行きしが、日の暮れて家に戻り、慌しくお疵に言ふ様、「今日夕方に、花又から つぎへ

〈12ウ・13オ〉

つゞき 戻らんとて、橋場の渡しを渡り越す時、向かひの岸から漕ぎ出す舟、乗り合ひに浪人らしい者が居た故、行

き違ひ様ふト見れば、去年の秋梅沢で、大八殿ト言ひ合はせ、金を騙つた音川家の侍に違はぬ様子。見つけられては大変と、顔を背けてこちらの岸へ、着くとそのまゝ一目散、後をも見ずに走つて来た。あの侍めも、売りつけた一軸が偽物故、その落度で音川家を暇になつたを口惜しがり、騙りの筋を吟味する気で、鎌倉え下つたところが、肝心の目当とする大八殿は獄屋に繋がれ、また相摺のお爪めは殺された故、残る二人の俺ト快甫を、尋ねてゐるトいふことは、この間人の噂に聞いて来たに、この辺りをまごつくほどでは、こゝらに俺がゐる様子を、嗅ぎ出したに違ひはない。今にもこゝへ斬り込んで来られたら、その時は足手まとひの左市はあるし、逃げるも引くもなりはせまい。何を言ふにも命が物種。それと思へば片時も、こゝらに足は止められぬ。わづかな雑具は背負つてなりとも、今夜のうちに立ち退くが、上分別と思案は決めた」ト、ひそ〳〵言へば、お疵も驚き、「よしそのことがないにしても、こゝへ来てから 次へ

〈13ウ・14オ〉

つゞき 間の悪さ。することなすこと一つとして、損の行かぬ話もなければ、辺り近所は借銭だらけ。近いうちには駆け落ちと思つてゐたに、そういふことを聞いては、なほさらこゝを逃げ、脇へ世帯を持つたなら、思ひのほかに仕合はせの、直ることのありもせう。とは言ひながら、今が今とはあんまり急な」と呟きながら、臥したる左市を背に負ひ、手当るまゝに掻き集め、風呂敷に引き包めば、痣平は今脱ぎし草鞋をすぐに引き結び、かの風呂敷をしつかと背負ひ、「表の方へ出たならば、辺りの人や咎めんか」と、裏の生垣押し破り、畦道伝ひ今戸村、山谷〔さん／や〕の方へと逃げ行きげり。

高田大八は鎌倉を立ち退きしより、痣平お疵が住ひ所は、武蔵国石浜と、よう〳〵聞き出し、「確かにこの家」と

尋ね当て、かゝる様子を夢にも知らねば、「今宵二人を殺さん」とて、表の方は人目を恐れ、裏手より忍び寄り、今痣平が押し破り、出でたる後の垣を越へ、刀引き抜き内に入り、見れば家内は取り散らし、人影は絶えてなし。出でゝ間もなきほどゝ見へ、壁に添へたる行灯の、煎り土器に燃え込みし、油染みたる灯心の、灯はそのまゝ消えであり。下皿滑み掻き立てつゝ、こゝかしこ見回すに、家に残りしものとては、貧乏神も持ちかぬる、骨のみ見えし破れ団扇、辺りに近き今戸焼、瓦火鉢に盛り上がる、松葉の炭〔し／よう〕の下燃えに、蚊遣火はなほかすかに煙り、他はつけ木の焚差ト、茶渋の染みしひゞ焼き茶碗、それさへ縁の欠けてあり。荒素堂に荒れ果てゝ、空家よりなほ凄ましく、今まで人の住まひせし、家とはさらに思はぬばかり。さほどにものなく見えながら、多きは茅屋の梁より、四方へ張りし蜘蛛の巣と、壁の破れより舞ひ込む蚊〔か〕のみ、たゞ目口にも入るほどなり。この有様に大八は

つぎへ

〈14ウ・15オ〉

つゞき 小首傾け独り言、「蚊遣りの燃えさし灯火の、まだ消えぬので思ひ回せば、さては彼奴らが今宵にも、鎌倉の牢屋敷を破つて、俺が逃げたことを聞き知つて、意趣返しに来るのを恐れ、慌て惑ふて逃げ失せたに違ひはない。今がた畦ですれ違ふた、二人の奴らの形素振り、合点が行かぬト思ひながら、心は急くし暗さは暗し、包んだ面を見ぬのが悔しさ。確かにあれこそ痣平お疵。足手まとひを連れしと言ひ、高荷を背負つた夜の道、よもや遠くは走るまい。後追つ付いて意趣晴らし、なぶり殺しにしてくれん」ト、気を焦りつゝまた越ゆる、心の鬼の茨垣、引き返したる畦伝ひ、「行く手は確かこの道」ト、後を慕ふて追ひ行きけり。

○香西喜太夫は、鎌倉を立ち出でゝ、痣平快甫の行方を様々尋ぬるうち、ふト、痣平は武蔵国隅田川のほとりに住む、といふことを聞き出でければ、すぐさま石浜の辺りに来て、在処を探せど知れかぬれば、「もしも川の向かひに

もや」ト、橋場の渡りを越ゆる時、向かひの岸に着きし頃、西の方を見返れば、つぎへ

〈15ウ・16オ〉

つゞき 行く舟の乗り合ひに、痣平に似し者ありて、しかもこなたへ見すまじと、顔を隠す様なる故、いよ〳〵心に怪しく思ひ、「ひつ捕らへて詮議せん」ト、また石浜へ渡り返すに、早その人は影もなし。「所詮今宵は、山谷〔さん／や〕の辺りに宿りを求め、明日再びこの辺を詮索せん」ト、浅茅が原の並木を横折れ、山谷の方へ行かんとするに、大八もまた、痣平お疵が後を追ひかけ、こゝに来るに、目指すも知らぬ闇の夜なれば、出会ひ頭に行き当り、

四のまきへ

三の巻より 気を苛立ちて喜大夫を、突き退けて行かんトする。「こは狼藉」ト大八が、鐺を取つて引き戻す。「面倒なり」ト振り払ふを、また支へつゝ争ふうち、畦に燃え立つ数多の狐火、光に双方顔見合はせ、「汝は去年梅沢にて、田丸宇内と作り名為し、金子を騙りし高田大八」「そう言ふ我はその時の、京家〔きよう／け〕の侍香西喜太夫」

つぎへ

〈16ウ・17オ〉

つゞき「汝ら故に浪々なせし、騙りの遺恨思ひ知れ」ト、斬つてかゝれば大八が、「オヽ、合点」ト抜き合はせ、並木の真砂踏み立てて、しばしが間斬り結ぶ。

この日は五月廿七日、辺りに近き玉姫稲荷に、宵祭りする夜神楽ト、音を合はせたる山谷辺りの賤が屋に、打つ紙砧、松吹く風も音添へつ、月昇らねば照らさゞる、鏡が池に飛び交ふ蛍、それにはあらで切つ先より、火花を散ら

して斬り結ぶ、手練も優るゝ喜太夫が、恨みの刃鋭くて、大八既に危ふく見へたる折柄、梢ざは〳〵ト、塒の小鳥を追ひ出でし、梟の羽たゝきして、落とし来るに驚きけん、パツト一度に狐火の、消へて再び真の闇、「天の助け」ト大八は、後くらまして逃げ失せけり。

ものがたりはこれより五年たつとみ給ふべし 山城国小幡の里なる土作夫婦は、泡之進が言葉に任せ、預かりし小吉を今は我が子トなし、育むうちに母親おのちも、鎌倉にて身罷りしト聞くに、なほさら頼り少なき幼子の、愛ほしく奔走して育つるに、いつか春行き秋暮れて、小吉が十ヲの年の冬、土作お菅諸共に、時の気の悩みにて、わづか七日経たざるうち、夫婦共遂に果てぬ。

夫婦ながら、はか〳〵しき身寄りといふ者辺りになく、たゞ土作が従兄弟なる宗八と呼ぶ男の子、都四条の辺りに住みて、歌舞伎の道具衣裳など、取り扱ふを業とするあり。それを呼び寄せ、村の者もうち寄りて相談なし、夫婦が家を取り収めしが、小吉は俄に孤児となれば、よんどころなく宗八が引き取りて、都へ連れ行き、我が家に養ふに、これより後は宗八が、弁当などを歌舞伎座へ つぎへ

〈17ウ・18オ〉

つゞき 日々に持ち運び、自然と俳優の道を覚へ、その性鈍き者ながら、これのみはさらに忘れず、なにとぞその道へ入りたき由を、宗八にも折々言ふ故、望みに任せ、その頃の名人ト呼ばれし俳優、坂田藤十郎の家に連れ行き、しか〳〵のことを頼むに、藤十郎も頼りなき小吉が身の様子を聞き、かつ憎げなき体を見て、ひたすらに不憫の者に思ひ、家に止めて養ひしが、幼名にてもいかゞなりト、彼が在所の小幡〔こ／はだ〕をそのまゝ名字につけ、名をば小平次ト呼び変へさせ、俳優の道を学ばせけり。

○痣平お疵は先つ頃、石浜の家を夜抜けして、危ふき所を逃れし後、北国の方へ下り行き、様々の世渡りなせども、不運のみうち続き、こゝに半年かしこに三月ト、所定めずさまよひて、経つとはなしに月日を送り、石浜にてもうけたる、倅左市は五つトなりしが、上野〔こう／づけ〕の国にありて痣平は、一年近く重き悩みに枕も上がらず、家財は残らず売り尽し、よう〳〵本復しながら、もはや冬の半ばトいふに、親子三人が一ト重衣の、襤褸をその身にまとふのみ。朝夕べの煙をも、立つべきようのさらになければ、かくては今に飢へ死ぬより詮方なしとて相談極め、物乞ひして都に上り、良きことにもありつかんト、巡礼の姿トなり、左市を伴ひ上野を、出しは冬の半ばなりしが、武蔵国秩父を巡り、甲斐国都留〔つ／る〕郡に入り 次へ

〈18ウ・19オ〉

つゞき 遠近を巡りしが、笹子峠を越へかゝるに、冬の日の短くて、まだ半ばまで登らぬに、暮れ果てて道さへ見へず、「所詮今宵は野宿をせん」ト、ようよう峠に登り着き、木陰に立ち寄り休らへば、高嶺々々を吹き降ろす、雪を越へ来る寒風〔かん／ふう〕は、剣に等しく身を通し、遠寺〔じ〕の鐘のかすかに響き、きらめく星も物凄し。

笈摺を下に敷き、眠りし左市をこゝに降ろし、お疵は辺りに散り敷く木の葉を、こゝかしこより掻き集むれば、痣平は懐より擦り火打ちを取り出し、火拵へするそのところへ、向かひの方の麓より、越へ来る者のあり。この闇の夜に提灯さへ、持たで険しき山坂を、探り足して登り着き、今痣平が焚き火する、様子を見てやこゝに立ち寄り、「こゝらに火の気のあろうとは、思ひがけなき地獄で仏、救ふト思ふて己もしばし、焚き火に当てくれよ」ト言ひつゝ、手探りにして傍の石に、腰打ち掛けて懐より、煙草入れ取り出し、点らぬ煙管を岩角に、がち〳〵叩きて煙草吸いつけ、つぎへ

〈19ウ・20オ〉

つゞき 燻らすこなたに痣平は、幾度か吹きつくれと、煙るのみにて燃えかぬれば、心を苛立て夫婦して、様々なせども埒明かねば、果ては互ひに根尽きて、「勝手にせよ」ト呟きつゝ、がらり投げ出す竹火箸の、音に等しく梢を鳴らし、どつと吹き来る山颪に、頼まで木の葉は燃え上がり、辺りは昼よりなほ明き、火影に傍の人を見れば、破れ垢つきし黒羽二重に、縄に等しき帯を結び、朱鞘の大小横たへしが、夫婦の者をきつと見て、「誰かと思えば痣平お疵。いつぞは会はんと訪ねたに、よくくたばらずにゐてくれた」ト、言ふに不思議ト痣平が、「そをいふ声は聞き知つた」「知つたも道理。うぬらがためには現在お主の高田大八。よもや忘れはしおるまい」ト、言ひつゝ編笠脱ぎ捨つる、顔見てびつくり「南無三」ト、逃げ出すお疵が襟髪つかめば、痣平は傍に臥したる左市を抱きて、燃へさしの枯れ枝取つてうち付くるを、大八は身をかはし、及び腰に斬りつくる、つぎへ

〈20ウ〉

つゞき 折柄傍の辻堂に、「高田大八、そこ退くな」と、言ひつゝ扉を蹴開きて、走り出る人ありけり。その名は四編の始めに説くべし。此文四へんへつゞく

種員作　国輝画

【図版】

上冊・下冊表紙

上冊見返し・1オ

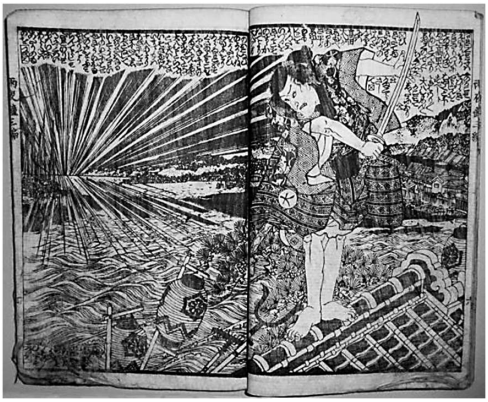
1ウ・2オ

2ウ・3オ

3ウ・4オ

4ウ・5オ

5ウ・6オ



6ウ・7オ

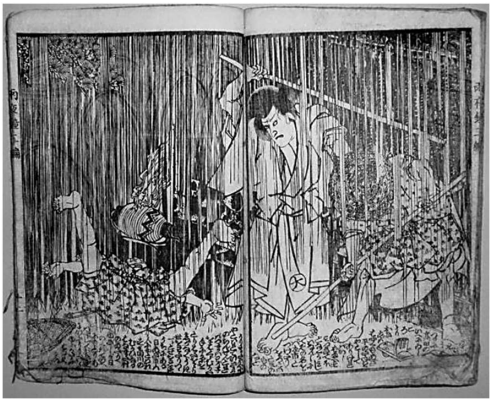
7ウ・8オ

8ウ・9オ

9ウ・10オ

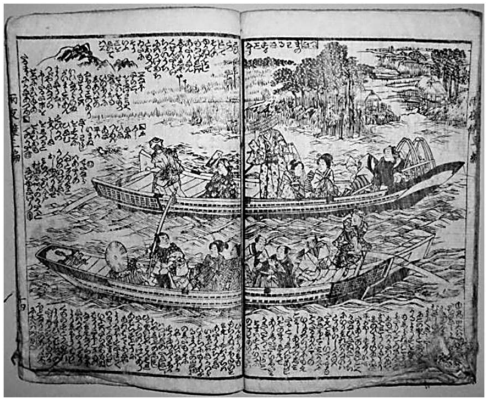
10ウ・上冊後ろ見返し

下冊見返し・11オ

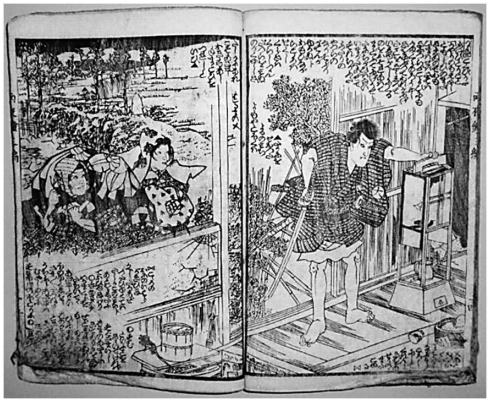


11ウ・12オ

12ウ・13オ

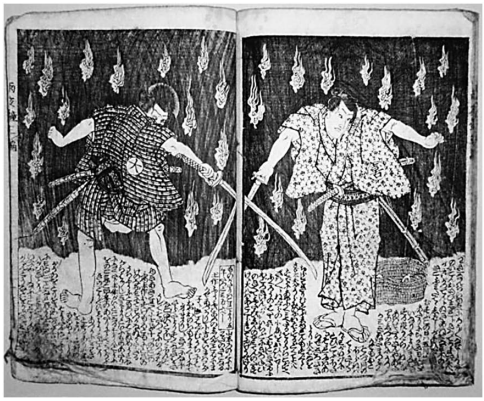


13ウ・14オ



14ウ・15オ

15ウ・16オ



16ウ・17オ

17ウ・18オ

18ウ・19オ

キーワード

合巻、四谷怪談、お岩、小平次、柳下亭種員、河竹黙阿弥、仮名垣魯文

19ウ・20オ

20ウ・下冊後ろ見返し

上冊・下冊　表紙（後刷り）